

二上山だより

キチジョウソウ(ユリ科キチジョウソウ属)

山麓の民家の庭で咲いているこの花がキチジョウソウ(吉祥草)だと教えてもらった。そしたら大龍寺の植え込みの下草としても植えられていた。目立たないがよく見ると可愛らしい。

日本の山野に自生する1属1種の植物。この花が咲くといふことがあるそうだ。二上山での自生地をご存知でしたら教えてください。林の下、日陰地に群落を作るそうです。



キチジョウソウ

二上山群の山々① 麻呂子山

二上山は古い火山で、主峰は海拔510mの雄岳、そしてその南の雌岳が474m。この二峰を男女の神に見立てて「ふたがみやま」(二神山、二上山)と呼ばれたとされる。

そしてこの二峰を取り巻いて、大小様々なピークがあり、全体として二上山群を形づくっている。そのピークの一つ麻呂子(まるこ)山(214m)に登った。

当麻寺の南西にあり、寺の借景を成しているお椀を伏せたような丸い山、それが麻呂子山である。この山の名は聖徳太子の異母弟である麻呂子(古)親王の墓があったという話に由来する。 ↓葛城市染野から見た麻呂子山



この山には当麻の焼却場手前から北方向いて登るが、二上山～竹内峠の縦走路途中から尾根伝いに行くこともできる。

麻呂子親王(皇子)は當麻寺の創始者とされ、又當麻氏の祖といわれているので地元にとっては、因縁浅からぬ人であり、その名がついたこの山は最も身近な里山であるが、余り登る人も無くいつ行っても静かなたたずまいを見せている。



海を渡って旅をする蝶・アサギマダラ

写真の蝶を見たことがありますか。この蝶はアサギマダラと言います。タテハチョウ科マダラチョウ亜科に属し、大きさはアゲハチョウくらいです。アサギは浅葱（色）で翅（はね）の紋様（薄青）の色を指しています。

かなりの昆虫少年だった私たちにとって、この蝶は実に謎めいた、魅惑的な憧れの的でした。私が育った長崎市浦上地域でこの蝶に逢えるのは標高の高い三山（みやま）の樹林帯だけでした。それも夏のわずかな期間に限られ、その生態は不明でした。

この蝶が「渡り」をすることが分かったのは、1980年代からの研究の成果です。小・中学生を含む多くの人々が参加して国内外のネットワークが作られ、蝶の翅に油性ペンで記号を書いて放し、他の場所で捕える「マーキング調査」が大規模に行われたのです。

その調査・研究の結果、アサギマダラが年2回長い旅をする事が判明、96年には山形から沖縄へ2240km、06年には石川県から中国浙江省まで1644kmの旅が確認されるなど、海を越えての長距離移動も明らかになりました。

あの小さな蝶のどこに、大海の波浪を越えて何千キロも飛んでいく能力とパワーがあるのでしょうか。しかも秋に南下する個体と春に北上する個体とは世代が違います。何故旅をするのか、どのようにして渡りの時期、方角を知るのか、長い距離を間違いなく飛ぶための方向修正はどうして出来るのか。こうした疑問の解明が「体内時計」の役割との関連も含めて進められています。

昆虫少年にとってもうひとつ不思議だったのは、アサギマダラの飛び方です。この蝶は人が近づいても余り逃げようとはせず、飛んでもフワリ、フワリとゆったりと飛ぶのです。お陰で捕虫網で簡単に捕まえることが出来ましたが、捕えつつも「もっとすばやく飛べよ、そうしないと鳥に食われてしまうぞ」と心配したものです。



ところが、この優雅な飛び方、緩慢な動きこそアサギマダラの自己防衛術だと言うのです。この蝶はガガイモ科の毒草を食べて成長し、成虫になってからも毒をもつ花から吸密して体に毒を蓄えます。そして優雅に飛ぶことで「私は毒を持っていますよ」とアピールしていると言うのです。うぶな私なんかには、驚くべき処世術で呆れるばかりです。自然破壊が進む中「その不思議な生き方で生き延びてくれ」と願っています。（以上109号）

